

新刊紹介

榎 田 一 路

山本薫著 『「自己」の向こうへ—コンラッド中・短編小説を読む』

大学教育出版、2012年、146頁

本書は2010年に出版された『裏切り者の発見から解放へ——コンラッド前期作品における道徳的問題』に続く、山本薫氏の2冊目の著書である。「はしがき」によれば、本書の目的は「コンラッドの中・短編のテキストが、個としての『自己』の向こうに共同体の可能性を見いだすまでの軌跡」を辿ることにある。コンラッドにおける共同体というとき、まず思い浮かぶのは船乗りの共同体であろう。それは同じ目的や絆で結ばれた均質な集団としてノスタルジックに想起される共同体であり、そこで展開される忠誠や裏切りの物語において、集団と個は互いに対立した二者択一的なものとして描かれる。しかし本書のいう共同体においては、そのような個と集団の二項対立そのものが根底から揺さぶられる。著者はコンラッドの『放浪者』に登場する「奇妙な友愛」を足がかりに、このような新しい共同体を、おもに二人の「大陸系」思想家との親近性のもとで捉える。まず本書のキーワードの一つともいえるこの「奇妙な」(“singular”)という形容詞には、Jean-Luc Nancy のいう「複数にして単数の存在」(“Being singular plural”)としての「共同性なき共同体」の得体の知れなさが含意されている。またそうした共同体において異質なものを異質なものとして受け入れる身振りが、Jacques Derrida が移民や難民の問題を論じる文脈で使う「無条件の歓待」によって捉えられる。

本書で扱われるのは、『台風』『闇の奥』といったコンラッド研究の「正典」以外にも、代表的短編ではあるがそうした正典の「他者」として著者が位置づける「秘密の共有者」や、これまでコンラッド批評のパラダイムであり注目されてこなかった「武人の魂」などがある。まず第1章の『台

風』論では、この物語の中心的関心である、船長がはたして賢者なのか愚者なのかをめぐるコンラッドの描写の「揺らぎ」を論じている。本作における船長は、職務への忠実さや秩序の重視といった“firmness”と、想像力の欠如、人種の優越感、そして金貨の分配の挿話のような金銭欲といった“stupidity”の両面を備えている。筆者によれば、船長の一見“fair”な行動の裏にある“unfairness”を見抜いていたはずのコンラッドは、前者と後者の間、つまり船長の英雄視とクーリーへの一体化、帝国の称揚と批判の間で揺らぎながら本作を書き終えたものと推測される。

第2章の『ナーシサス号の黒人』論では、これまでほとんど議論の対象とならなかったワミボウの隠された役割が論じられる。コンラッドの「印象主義的」手法によりぼんやりと描かれる乗組員集団は、連帯感で結ばれた均質な集団というよりも、いわば雑多な共同体である。そのような印象主義的語りの裏に著者が読み取るのは、この集団から聞こえてくる明確な「意味」としての革命の音に耳を塞ごうとするコンラッドの姿である。ワミボウの視覚と聴覚の鈍さ、そして知的把握力の欠如は、目の前の現象を理解や知に回収することを防ぎ、事物の表層にとどまることを可能とする。彼の存在をいわば現実をろ過するフィルターとして利用することで、コンラッドはたとえば『西欧の目の下に』のラズーモフの物語のような「非西欧の耳」のもたらず悲劇を回避し得たのではないかと著者は論じる。

第3章では、『ナーシサス号の黒人』におけるそのような塞がれた耳とは対照的に、『闇の奥』が複数性に関かれた「新しい耳」の物語として読まれていく。著者はマーロウがはるか先の出来事まで「知りすぎている」点に注目し、その聴覚に「個の視点」という「技法」では説明しきれない、個人の主体を超えた「新しい耳」、すなわち Nicholas Royle のいう「テレパシー的なもの」の可能性を見る。そして「聞く人」マーロウの捉える「声」が導くものは、「主体」概念を前提としたあの「自我の内奥への旅」でも、自他の境界線の「間」で起こる Bakhtin 的な複数の「声」の対話でもなく、そうした「主体」や「間」の消滅した「奇妙な複数性」の可能性ではないかとしている。

第4章では「秘密の共有者」における船長のレガットに対する身振りが新たに捉え直される。従来のコンラッド批評において本テキストは孤独な

船長の苦悩の物語として読まれ、その中でレガットは船長の隠された自我として解釈されてきた。それはいわば他者の不在な、自己との閉じた関係の物語であり、あたかも同時期に進行中だった『西欧の目の下に』が文字通り「西欧の目」の下に他者を置き語る、いわば自己言及的で閉じた物語であったのと同様の捉え方であろう。しかし著者は、逃亡者レガットを客人として、船内の掟に背いてまでも受け入れようとする船長の身振りに、Derrida のいう「無条件の歓待」、つまり他者に対する無限の「応答可能性」を見る。この「無条件の歓待」においては、主人が主体的に客人を迎え入れるのではない。そこでは主人と客の階層関係そのものが容易に反転するのであり、船長はレガットという他者により、主人としての「根源的な所有権」をはく奪されると同時に「自己」の牢獄から解放されるのである。そのような物語として読まれるならば、このテキストは他者に対して絶対的に開かれた場であり、その意味で厳しい倫理観の支配するコンラッドのテキストにおける「他者」として位置づけられる。著者によれば、読者もまた、正体不明の聞き手という「他者」として本テキストを無条件に受け入れることが求められるだろう。

「秘密の共有者」と、複数性に開かれた「無条件の歓待」の関係は、次の第5章で「忘却」という補助線を引かれてさらに展開される。髭の一等航海士の戯画と白い帽子的挿話を通じ、この物語における過去の感覚の欠如と語り手の忘却ぶりに隠された意味が明らかにされる。まず、髭の一等航海士は語り手とは対照的に、出来事の説明や謎の解明に固執するのだが、その姿は語り手により戯画化され、笑い飛ばされている。筆者によれば、この語り手の姿勢と同様に「秘密の共有者」のテキスト自体も一貫して「考え抜く」「説明する」こと、過去の出来事を体験として堅固に言語化し馴致する主体としての身振りを回避するのである。また船長がレガットに与えたあの白い帽子が、いつの間にか彼を離れ海面に漂う様子は、船長が主体を回復しようとする身振りとその虚しさの表れとも読めそうだが、著者はそこからさらに踏み込んで、Derrida のいう主体を超える可能性を含めた「贈与」として見直す。ここでは忘却こそが贈与であり、その贈与とは主体との関係性以前の場で起こる。これらの二つのエピソードには、個人的主体の概念を超えた「複数的なもの」の可能性が示されており、そのよう

な複数性を含む共同体を成り立たせるものこそ、前章で論じられた「無条件の歓待」なのである。

この出来事の動機を探る主体としての自己に距離を置こうとする姿勢は、『陰影線』の語り手である「私」にもみられるだろう。続く第6章では、語り手が目的論的、道徳的な語りを回避し、自伝的告白における「私」の権威を放棄していることが指摘される。それゆえにモラリストとして過去の自分の動機を探ろうとするジャイルズは、彼にとって物語内容的にも物語言説的にも疎ましい存在であった。語り手は物語からジャイルズを退場させることで語りの指揮権を獲得するのだが、その後も自己暴露を迫るジャイルズの「亡霊」と幾度も対峙することになる。『陰影線』における幽霊をテキスト性として解釈するとき、コンラッドのテキストにお馴染みの、あの物語の虚構性や、言葉（物語内容）と実体（現実）との乖離に対する語り手の自意識が読み取れる。こうした語りの「亡霊」的性質、言い換えればテキストのテキスト性を意識することにより、語り手そしてコンラッドは告白する「私」の権威から解放されるのである。

第7章において“*The Tale*”を読み解くキーワードである「中立性」は、『台風』論で示された立場の揺らぎと、「秘密の共有者」『陰影線』論で見られたような、堅固な言語化による出来事の馴致を回避する姿勢ともつながっているだろう。本短編における司令官は、従来の批評ではうそを嫌悪する清廉で誠実な人間として解釈されてきたが、筆者によれば彼の「中立性」は道徳的なものというより気質的なもので、単にうその判断を回避しているに過ぎない。Northman が中立を装っているのか否かの判断を自分では下せない司令官は、暗礁への航路を教えることで中立かどうかを単に「試した」のである。一方、自分の場所がわからないと語る Northman の言葉は、同様に自らの立ち位置のわからぬ司令官自身の内なる声として象徴的に響く。ゆえに Northman の中立性を試すことは、それにより司令官が自身の中立性についての「真実」を知ることに他ならない。このような動機があるならば、敵に対する中立を許されぬはずの司令官の行動は自らの職務に対する裏切りであるが、一方それは船を沈没させた結果から見ると愛国的行為となる。だが本作において司令官の行動は最終的判断に付されぬまま物語の外に投げ出されることになる。

中立性とは、言い換えれば自己と他者、敵と味方の判断を避けることである。コンラッドのテキストを、このようないわば中立を保ったまま放浪するテキストとして捉えるならば、後期コンラッドの想像力の衰退を指摘されてきた短編「武人の魂」も、新しい共同体の物語の可能性に開かれることになる。第8章において、それは「共同性なき共同体」、すなわち互いに離れた者同士の、謎めいた得体の知れない共同体として示される。そのような共同体を、著者は主に本短編における三つの関係性から指摘する。まず、トマソフと彼の殺害したド・カステルの関係は、Derridaのいわゆる「喪の作業」から読み解けるだろう。そこでは前者は後者を永遠に失うことはなく、前者にとっての後者が完結したイメージとなることもない。次に、この物語の語り手である老人にとって聞き手の若者とは「自分の言語を理解せず、年齢も自分とはかけ離れている人々」であり、共感も共通点も存在しないまま共にある彼らは、まさに Alphonso Lingis のいう、意味や目的を持った合理的コミュニケーションを攪乱する「死の共同体」にあったといえる。最後に、同様に本作品において自身が最も共感しにくいロシアの武人への仲間意識を好意的に描いているコンラッドも、Lingis の言葉を借りれば「自分が信じることができない」人々の中に身を置くことで、古典的な共同体を超えた、来るべき共同体としての「我々」の物語を示しているのかも知れない。

最後に本書を簡単に評するなら、本書における共同体論は三つの意味で刺激的だろう。第一に、従来のコンラッド批評のパラダイムでは十分に評価されてこなかった後期コンラッドに新たな知見を提供し、比較的初期から後期に至るテキストの時系列的な分析を通じ、いわば新しいコンラッドの発見と呼ぶにふさわしい、説得力のある論が展開されている。第二に、Derridaの「欲待」論や Nancyの「共同体」論などを介して、コンラッドのテキストを読むことが、実は現在のグローバル化する世界を取り巻くアクチュアルな問題意識に接続されていることに気付かされる。そして第三に、従来のナイーブな「倫理」的解釈とは異なる、いわゆる批評理論後の新たな「倫理」性をコンラッドに読み取る可能性を開くものではないだろうか。